野沢温泉スキー合宿 数えで２０年

11 期　青柳 健二

野沢温泉ＯＢスキー合宿は、長野オリンピックがあった１９９８年に始まり、以後途絶えることなく開催され、今年（２０１７年)）で第２０回、数えで２０年を迎えることとなった。良く続いて来たものである。途中から幹事としてこの合宿に携わってきた者として感慨に堪えない。

このような行事が、２０年間も絶え間なく続いたのは稀な事だと思う。様々な要因が絡み合ってその幸運が生まれたとも言える。ここでは、２０年を振りかえりながら、その秘密を解こうと思う。

まずスキーが中高年の生涯スポーツとなる要因が１９９８年頃に生まれたとい言えよう。そうカービングスキーの普及である。カービングスキーは日本でもその数年前から出てはいたが、長野でオリンピックがあり一気に注目されたのだ。私はスキー合宿の前にこのスキーを手に入れて、野沢が初乗だったが、その素晴らしさに魅了された。（やまざと９号「カービングスキーの勧め」参照）スキーが短くなり、曲がりやすく操作がし易くなった。何より余分な力を使わず曲がれるので、疲れが少なくなった。このスキーの普及と共に、ゲレンデが雪上車で圧雪されるようになり、馴らされた斜面をスピードに乗って一気に滑り下りる快感を味わえるようになったのだから堪らない。

スキー合宿は、私が５０歳の時に始まったのだが、カービングスキーによりスキー年齢が一気に延びたのは間違いない。そして、若い時にスキーをしていた者が、スキー再デビューするのを大いに助けることになる。　ユニクロの登場により、フリースとダウンが価格破壊されヒートテック等の普及で、寒い中でも快適に過ごせるようになった。ゴンドラとクワッドリフトで、リフト待ちは、その昔に比べると格段に少なくなった。

スキーは、若くて体力のある者がするスポーツから、生涯楽しめるスポーツに様変わりしたのである。スキー合宿の年毎の参加者数は、第７回から１５人を超え、以後安定して２０人前後を保ってきたのは、そんなスキー環境の変化があってのことである。

（私のｶｰﾋﾞﾝｸﾞｽｷｰ１号　ｻﾛﾓﾝ X-FREE 09）

もう一つ、スキー合宿を行い易くした科学技術の変化と言えば、インターネットの普及がある。私は、第３回のスキー合宿からこの合宿の運営に関わるようになったが、開催案内は、全てネットのメールで行っている。新たな参加者を募る為に１２月末発行の「やまざと」にも掲載しているが、開催案内の発信から参加受付・参加者の取り纏めまで、全てメールで行い完結している。
私が、インターネットで何時からメールを始めたかは定かでないが、スキー合宿で使い出して本格化したのは間違いない。２０００年の「やまざと」に載った第３回スキー合宿の実施報告は、そのメール文を転記したものだ。そこには、スキー合宿の４ヶ月前から喜々としてメール通信して（遊んで）いる様が見られ赤面ものである。

２０人近くが参加する行事が、郵便の手間を掛けずにメールだけで行えるようになったのだから、楽になったものである。会社の仕事は、パソコンで行う時代となり、個人の遊びもメールで行えるようになった。そして、今やスキー場内でも携帯電話で通話しメール連絡が出来るのだから、進んだものである。この通信手段の進歩が、この合宿の発展と継続に寄与しているのは間違いない処である。（私は未だガラケー愛用であるが）

そして、開催案内や実施報告を掲示してくれるなど、我々のネット活用の場であるＯＢ会のＨＰを管理運営する、奥名さんに感謝したい。

開催地の野沢温泉には地の利があった。長野オリンピックを機に、長野まで新幹線が通り、高速道路も整備された。（1997 年長野新幹線開通、1999 年上信越道全線開通）東京から長野まで新幹

線で１時間半、金沢から飯山まで高速道路が通じ、野沢温泉まで抜群に速くなった。そして、2015 年に北陸新幹線が通じて金沢から飯山まで１時間１５分である。近くなったものだ。

スキー場が野沢温泉、宿が「ふるさと」と決まったのは田村さんのコネがあったからだと聞いているが、これが大正解であった。スキー場は広大で雪量・雪質とも申し分なし。ゲレンデは多彩で、上級者は勿論初級者も楽しめる。特に、山頂の毛無山 1650mからの眺望は抜群、そこから滑り降りる「やまびこゲレンデ」は 1500m 級の快適バーンで、スキーの喜びを最高に味わえるコースである。ここは一時期までスノーボードが禁止されており、カービングスキー天国であった。

そして、最後に全長 5000m、標高差 885mの超ロングコース「スカイラインコース」を滑り降りるのが定番だが、無事完走した時の達成・満足感は、「この為にスキーがある」と言えるものだ。

スカイラインコースを滑り降り、少し下れば宿の「ふるさと」がある。この近さを、私は気に入っている。満足感、時には疲労でグッタリとなりながら宿に戻り、ロビーの薪ストーブにあたりながら甘酒で疲れを癒す･･･至福の時、極まれり。

（ふるさとの薪ストーブの上に甘酒が　2012 年）

「ふるさと」には、全２０回を定宿として利用させていただいた。スキー場と宿の変更を検討した事もあったが、結局この宿の他に我が合宿が出来る宿はなかった。感謝状を贈呈する所以である。

直前まで参加人数が固まらない中、部屋を確保してくれている。大人数でワイワイ騒いだり、部屋の中で歌を唄ったりしても許してくれている。食堂や廊下には、道祖神やお雛様などが置かれ、季節の花が活けられている。額に入った絵も素敵だ。さりげない持て成しに心が休まる。リレハンメルオリンピックに出場した西方仁也さん（オーナー西方清さんの従弟）の大きなジャンプスキーが展示されていたこともあった。

自家製のコシヒカリと野菜など地元の食材を使った料理は、見た目にも美味しい創作懐石料理で、関西の名店で修行されたオーナーご子息の西方公一さんが、2003 年より腕を振るっています。2005 年には濁酒（どぶろく）の免許を取得し、濁酒や甘酒を楽しむことが出来るのは嬉しい事です。また、2010 年には内湯が天然温泉になりました。源泉は神戸虎温泉、そこから湯を運び循環加温しています。ホカホカと温まり筋肉痛にも効果あり。

近くの「中尾の湯」は、野沢温泉外湯１３湯の中で一番大きな風呂だ。趣ある木造湯屋建築の中にあつ湯とぬる湯があり、麻釜から引湯している。湯温は８５度を超えるから、本物の温泉に入る喜びを味わえる。守り仏は、迷企羅大将･阿弥陀如来。

かような宿「ふるさと」を、我々は初回から、ほぼ同額の宿泊料金で利用させてもらっている。有り難いことである。まだまだ、引き続きお世話をお願いしたいと思っている。

（雪に埋もれた「中尾の湯」　2009 年）

今回の第２０回記念行事の目的に「ＫＵＷＶの後輩や現役部員たちに『野沢温泉スキー合宿の文化』の継承を願う」と記した。

では、この文化とは何か。

それは、単にスキー好きが集まってスキーに興ずるだけではない何かが、この合宿の中で生まれ、育まれてきたということである。

まず、文化を生み創るのは人である。スキー合宿は、ＯＢならば誰でも参加出きる。結果、

２０回で４２名のＯＢが参加し、家族・友人の１７名を加えると５９名が参加している。
その参加者は、０期田村さんから２１期栂睦美さんまで、勿論学部は様々で、雑多な人間の集合体だ。当然、参加した時に初めて会う人も多いし、何拾年振りかの再会という人もいただろう。共通項は嘗てＫＵＷＶに在籍していたこととスキーが好きなこと。それだけで充分なのだ。

初めて参加したスキー合宿、名前は知っていても初めて会う人が多い。なのに、一緒に滑っているだけで、心が和み楽しくなる。そして、スキーを終えて宿に戻り、車座になって話をすれば、もう現役時代のように愉快になれる。何故だろう。

２０年の間に、そんな楽しさ作る仕組みが出来あがった。スキーとアフタースキーの楽しさを演出し記録するビデオ撮影。夕食後の団欒でのお茶会、夜の宴での映写会での活動報告だ。

ビデオ撮影は、加藤さん・保田さんの二人の理系才人にして趣味人の存在により行われてきた。

（ビデオカメラを構える加藤さん　2002 年）

まず、加藤さんが 2000 年の第３回の合宿にビデオカメラを持込み、スキーシーンを撮影したことから始まる。まだカセットテープの時代、ビデオが結露をおこし、折角撮った名シーンがオジャンとなった悲劇もあった。一人ずつ順番に滑走シーンを撮ったり、集団で滑走するシーンも撮った。そのうちに、加藤さんはストックなしに、ビデオを抱えスキーヤーを追いかけて撮る神技を発揮するようになる。夜には、撮ったビデオをテレビに写して、皆の滑り振りを評価し合うのも楽しい。

加藤さんの真骨頂は、編集の妙にある。撮ったビデオと写真、メール文やスキー場パンフレットなどに音楽を入れて編集し、愉快な作品に仕上げた。第３回の歌に合わせたスキーシーンが楽しい「冬の歌」、第４回のプロジェクトＸの歌と語りで作られた「プロジェクトＫＵＷＶ」、第５回の文化人類学の考察が入る「文化との遭遇」の３部作は遊び心満載ながら文化の香り高い名作である。

ビデオカメラがハイビジョンになると、パソコン環境もあり、その編集を主に保田さんが引継ぎ、加藤さんと共にビデオ撮影と編集によるＤＶＤ化が継続されている。カメラは記憶媒体がハードディスクとなり、電池容量も増え高彩度での長時間撮影が可能となった。その分、編集は大変で、その苦労振りは保田さんのエッセイで確認頂きましょう。

記録媒体としての動画の価値は絶大である。スキーの滑り振りだけでなく、食事時の語らいや夜の宴での映写会の内容までも、広範囲に記録されている。全２０回のスキー合宿で１５回分のビデオが残されている。参加した仲間たちの、あり日の実像の記録として価値ある資産となった。ただし「おいおい、こんなんだったのか？！」とチョット情けない画像も多く含まれているのだが。

古都金沢で生活した仲間たちの合宿であるから、茶会が開かれるのは当然の成り行きである。

（加賀の抹茶　お点前の一コマ　2007 年）

記録では、第３回の合宿で村田茶匠によるお点前が行われている。第７回には舟田さんは和装でお茶を点ててくれた。第１０・１１回には、舟田さんの友人の増泉さんが和装で琵琶を披露し、その後にお茶会が開かれた。第１２回は、ベテラン女優村田さん・新人女優寺西さんに舟田さんを加え、和装３人の共演となった。スキー場とは思えない和文化が香おる加賀の抹茶の茶会は、スキー

合宿に欠かせないものとなり、最近は、宿の方々にも振る舞って感謝されている。茶菓子は皆が持ち寄る各地の名産品。夕食から夜の宴が始まるまでの、心休まる時間として大切な行事なのである。毎回、大切な茶器を野沢まで持ち込んで、加賀の抹茶を用意して、そんな時間を造ってくれて来た村田さん・舟田さんに感謝いたしたい。

プロジェクターを使った映写会は、第９回から始まった。舟田さんのヒマラヤトレッキング報告の為に、芝田さんがＥＰＳＯＮ製プロジェクターを持込んだのだ。スクリーンは、朝ぎり・夕ぎりの部屋を仕切る襖２枚を使用。これが丁度良かった。「エベレスト山群３大展望ピーク登頂トレッキング」ゴーキョピーク・カラタパール・チュクンピークからエベレストを望む２８日間の山旅を舟田さんは自分が撮った写真を映しながら語ってくれた。（並木美卯「エベレスト見に行くもん！」として書籍化）純白の氷河を被ったエベレスト山群を望む５０００m級のピークに登るトレッキング、その美しさと大迫力に圧倒された。

この映写会は、プロジェクターを私が借受け、以後継続され、スキー合宿の目玉企画となる。山行の報告だけでなく、色んな活動の報告がそこで行われた。「〇〇さんは、こんな事をしていたのか！！」と驚かされ、刺激を与えられることとなった。佐藤さん「金沢ー名古屋ウルトラマラソン」、松下さん「鎌倉ー金沢自転車旅」、吉野さん「カナダ・ウィスラースキー」、舟田さん「キリマンジャロ登頂」、上馬さん「白山の雷鳥」などが印象深い。また映像はなくても、野村孝弘さんの「癌研究への道」は、研究者人生の奥深さを知らされ感慨深いものがあった。

私も「ゴーキョピーク登頂」「モンブランスキー旅」を映写会で報告することとなるが、それは先の刺激が素になってのことである。

この映写会の成功には、デジタルカメラの普及が大きく寄与している。私は、第５回からデジカメを使用しているが、誰もが気軽に綺麗な写真を撮れるようになった。枚数を気にせずシャッターを押し、気に入った写真をパソコンに取込み写し出すことが出来る。５年前から、野鳥の写真を観てもらっているが、デジカメの進歩あってのことである。ここでも技術進歩に助けられている。

（プロジェクター映写とエアスキー　2010 年）

かようにして、ＫＵＷＶ４０周年を前に、山小屋酒場で田村さん、辰野さん、舟田さん等が発案したＯＢスキー合宿は、今や海外からのスキーヤーで賑わう野沢温泉スキー場で絶え間なく継続され、数えで２０年となった。

私は、１９９７年冬の「やまざと」に掲載された「ＯＢスキー合宿 in 野沢」」に即座に飛びつき参加してから、準皆勤でこの合宿に参加することとなる。途中から幹事の役割を負うことになるが、１２月の開催案内から２月のスキー合宿を終えてのお礼メール発信まで、幹事の仕事も特段苦にすることもなく、むしろ喜びを感じながら行うことが出来た。それは何よりスキーが好きなことが根にあるが、好きなスキーをＫＵＷＶの仲間たちと行うことの楽しさを味わうことが嬉しいからだ。

このスキー合宿には、５９名ものＯＢと家族・友人の方々が参加されているが、私はその全員と顔を合わせている。その半数以上が野沢で初めて会った人達だ。一回きりの人も多いが、皆さんと和やかで楽しい時を過ごすことが出来た。これは、私がこの２０年間で得た大きな財産である。このような場を提供してくれたＫＵＷＶと参加された全ての方々に感謝申し上げたい。

第２０回の記念合宿には、初参加の方が３名いた。堤さんは埋もれていたスキーヤー。スキーが好きだがスキー合宿に参加していない人がいた。まだまだ、新たな血が追加されうる可能性を実感。そして、吉田洋次郎さんと元ＯＢ会長の大島さんは、「滑らないスキー合宿」に参加された。この

スキー合宿の新しい試みに賛同され、仲間たちとの語らいや野沢の街歩きを楽しんだ。かつて合宿でスキーをしたが、歳を重ねスキーを引退された方もいる。そんな方達も遠慮なくまたこの合宿に参加してもらえるのではないかと期待している。

ただ、このスキー合宿の仲間が、２０期松下さん以下の若手ＯＢには広がらないのは、残念である。このスキー合宿は、いまや全員が優待券で滑れるシニアスキークラブとなっているが、そろそろ若いスキーヤーの登場が待たれる処である。今、ＫＵＷＶ現役ではスキー合宿が行われていない。雪国金沢のワンゲルなのに。私はワンゲルでスキーを覚えた。スキーが出来れば雪山での行動力も増す。何よりスキー程面白い遊びはない。

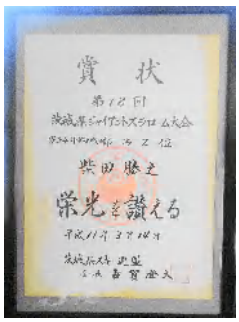
今、山小屋作業に現役が参加している。彼ら現役がスキー合宿に参加され、この合宿の楽しさを実感し、スキー合宿を復活して欲しいと切に思う。

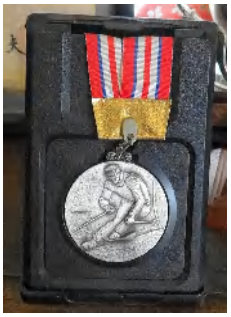
２０年に渡るスキー合宿で、大きな事故が起きずに来れたことにはホットしている。第３回初参加の高田さんが、シュナイダーコースで転倒し靭帯損傷の怪我を負ったのが、唯一地元の病院の世話になった事態である。まだ現役で忙しく活動していた時期であり、彼にとっては痛い事故であっただろう。　彼は、第１２回に復活参加を果たしたが、夜の楽しみの方がメインとなったようだ。怪我をきっかけにダイエットと筋力強化に務め、ゴルフは今もフルに続けているのは偉い。

最後に、２００７年に逝去なされた柴田勝之さんと守内成一さんに触れておきたい。

柴田さんは、第３回の合宿に飛び入り参加された。妙高でのスキー大会参加後に奥様と参加されたのだ。以後、第7・8・9回と参加されている。茨城県代表としてマスターズ大会に参加される脚前であるから、当合宿の最速スキーヤーである。私は、野沢の他にも志賀高原でもご一緒したが、スキーに対する情熱と研究心には驚かされたものだ。雪質や課題により数本のスキー板を使い分け、カービングターンの強化に励んでおられた。

柴田さんは、東海村の原子力研究所に勤められ、原子炉の免震構造を研究されていました。　2011年の東日本大震災による福島第一原発の事故発生の前に亡くなられたのですが、柴田さんの英知が必要とされることがあったのではと思うと、残念でなりません。





（柴田さん　スキー賞状と銀メダル　1999 年）

守内さんは、第７回・８回に参加された。私とは年次も学部も同じであり、同期の小山さんや私の誘いに乗っての参加であった。第７回は、同期が８人占めており、１１期の全盛期である。守内さんは長年勤めあげたハウスメーカーを退職したところで、冬の遊びとしてかって楽しんだスキーを選んだ訳だ。スキーでは、柴田さん・保田さんの名手と滑り、席巻するカービングスキーに刺激され、夜は、白衣の Dr 田村さんにお酒と語りで薫陶を受け、和装の舟田さんのお点前を楽しむなど、野沢スキーの楽しさを満喫する。そして、翌第８回は、スキーをカービングに一新して参加し、カービングターンの感触を味わう。夜は、片田道子嬢のピアノ演奏と合唱を楽しんだ。これから、たっぷりスキーをスキー合宿を楽しもうと思っていたのだが、翌々年の秋に突然の病魔で天国に召されてしまったのだった。

お二人のご冥福を心よりお祈りいたします。

柴田さん亡き後は、第１２回からは同じ８期の山村さん・野村さんが参加されるようになる。また、同じ学科の先輩の佐藤さんが第１１回から参加しており、７期の村田さん、保田さん他９期の方々を含め、柴田さんを知る世代が変わらず当合宿を盛り上げてくれていることが嬉しい。

一大勢力を誇った１１期は、近頃は当合宿から離れる方も出ているが、井上夫妻が復活し、片田さん・上村さんが健在、私もまだまだ頑張るつもりでおり、古希越え世代の力を発揮していきたいと思う。

そして、この合宿に集う楽しい仲間たちが、スキー合宿により益々元気に健康を維持し活躍され続けることを願って、筆を置きたい。